

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成30(2018)年
1月号
通巻569号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成30年1月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監修
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



岡山県瀬戸内市邑久町、長島の平成30年初日の出

文化講演会講師の宮崎賢氏撮影 (講演会報告・6頁)

昭和59(1984)年12月23日 降誕祭法話より (下)

病氣をして思ったこと

法主 矢追日聖 (満73歳)

脳血栓と白内障

今日は、朝九時頃には雪花が散っておりまして、ラジオでは「最近の冬では一番寒い。大阪は零下三度や」言うてました。それがこうして時間たつてまいりまして段々暖かくなってきて、冬らしい朗らかな天候になってまいりました。まあ天も祝福してくれてると私は心から喜んでおります。

私は七十三歳というような年まで生きさしてもらって不思議やと思っております。子供の時に、はたから「弱い弱い」言われるし、「長生ぎはしないだろう」と思っていたから、今日に皆さんとお話し出来ることを想像もしてなかったんです。それがやっぱり五十年、六十年と生きてきますと、何かしら健康に自信持ち過ぎましてね、病氣ということを忘れてしもてん。

私は昭和二十年の終戦後にこの山へ入ってから、牛のケツ叩いて、田の中の仕事も筋肉労働もさしてもらいましたけれども、お陰さんで一日として寝なかつたし熱も出たことない。食うものは満足に食わないで、言うてみたら栄養失調になつたりしながら重労働をやつておつたんやけれども病氣になつたことはなかつた。それが悪かつたと思うんです。

昭和五十五年に、私は初めて病氣したんです。これはほんの僅かでしたけれども、頭の中、こつち側の血管がちよつと詰まつたと思うんやね、脳血栓いうやつ。

それで身体の左半分が、これ中風やね、ブルブルツとなる。

倒れる前の日は六月十六日でしたから、丁度田植えする前の日です。田に水一杯張ったんです。鎌持って田の中に入って、あっちこっち代掻き(田植え前の水を張った田んぼの泥を平らにならす作業)やとって、その晩に寝て、明るく日の朝六時か七時に一回便所行った時はどうもなかつた。

「ああ田植えに行かんなんなあ」と思って、いよいよ起きようと八時頃立ったら手が動かないんです、上がらない。歩いたら足が敷居に引つ掛かっている。痛いことも痒いことも何も無いので「おかしいなあ」と思ってね。それがまあお陰さんで三日間で治りましたけれども。

それでも病院の中で四十日ばかり遊ばさしてもらって、その養生の間にもいろいろなこと考えました。「人間で弱い体やのに、そんなことに対して自信持つというのはけしからん」と神さんから叱られて、頭ごつんと金槌で突かれたんやと思つて反省しました。昔の人は「一寸先は闇や」と言うたけれども、やっぱり人間明日のことは分からないというようなことも勉強させられてね。

それから今さっき話したように(※昨年12月号参照)、私は子供の時に目え悪うなつたんですけれども、今度また目が悪うなつたというのは、六十歳過ぎてからでしょうね。これは老人性の白内障やから、世間の人もよう患うてる病気です。それで丁度一昨年あたりでしょうかね、ほんまに世の中見えにくくなってまいりましたね。だから去年の八月の暮れから九月の初めにかけて、両方の目の水晶体抜いてもらつたんです。それを見せてもらつたんやけどね、こんなちっちゃいのがビール瓶みたいな色になつてる。「これだけ曇っ

とつたら、そら見えないのは当たり前や」と思いました。

それで世の中がものすごく明るうなりました。目の映像が映るところが一番奥にある網膜やから、それは異常なかつたようだと非常に有難く思ひましてん。一緒にこの眼鏡を作つてくれたんで、ピント合うて物が良く見えるんです。目の検査しますと〇・七らしいんで、それやったら近眼の時と全然変わらないうですよ。

脳血栓と白内障の二つの病気をしましてね、「これは医学の進歩やし、お医者さんも結構や。世間様のお陰やなあ」と、またこの年になってから社会に対しての新しい感謝の気持ち、喜びの気持ちになってきたということが、私の人生の中において大きな収穫やと思つております。

霊界の人と二人三脚

我々人間は皆、霊界にいるいろんな人達と何かの形で交流をしながら生きておるんです。霊魂です。肉體はありませぬけれども、霊界の人をおろそかにしちゃいけない。霊界の人と生きてる人間とは絶対に二個一、姿を持った私達がいわゆる二人三脚で生きさしてもらつておるといふことを皆さん方に認識してもらつたら、ほんとに有難いなあと思ふんです。ここの祭典も霊界の人と交流を持つ行事なんです。

また皆さん方もご先祖さんをお祀りしてはると思ひますけれども、その形はね、例えば日々、ご先祖さんに対しても朝起きたら「おはようございませう」とます挨拶をする。どこか出て行く時にも「行ってまいります、頼みますよ」と。また帰つて来たら「ただいま無事で帰りました、ありがとう」というような交流をやるんです。そうすると

死んだ世界の人達は皆喜んでくれます。その心が生きておる人間の世界の方に回つて来るんで、心配事が少なくなつてくる。

そんなことも皆さん方が今から心得てもらつたら、将来において幸せに暮らしていけるだろうと私信じるんです。これは私の長年の経験から皆さん方に申し上げるんで、一つ騙されたと思つて実行してもらつたら、あんた達が死んだ時に「やっぱり聞いた通りやつたなあ」と初めて喜んで頂けると思ふんです。

言霊が宇宙に残る

それから皆さん方、人を疑うたり人の陰口を言うたり、人の害になるようなことや人格を傷つけるようなこととか言葉とかは出来るだけ慎んで欲しい。言霊と言ひまして、一旦口に出したものは人間の耳からは消えてますけれども、宇宙の中には言葉として残つておりますから、この世に生きてる時に自分が口から吐いたものや心で思つたことは、テープレコーダーのように全部残つていて、死んだ世界においてはそれが全部出て来るんです。

だから、仏教では閻魔さんのところで調べられるとか言ひまして、裁判されて鏡を持つて来られたら、一生に出会つたいろんなことみんなそこに出来ると言うの。それで「お前は地獄行け」「お前は極楽行け」というように区別されると説いております。

それは本当を言うと、死んだ時に閻魔さんでなく自分で自分を責めるんです。だから皆さん方は、出来るだけ人を褒めるとか称えるとか、人の良さを話すとかが、悪いとかは目を塞いでええとこだけ見るとか、そういうふうな心で生活して

おりますと、死んだら、いわゆる極楽のようなそんな世界で安定して生活出来るようになるんです。

まああの世でなくともね、この世の中でも地獄極楽あるんです。我々は肉体を持って生活してる面と、肉体なしで生活してる面との両面があるでしょ。ということは私個人で見たかて、肉体を持っていての私と、肉体を持たない私の心の二つは即一体になっておるんですね。

十二月二十三日は私の誕生日と月次祭やからお参りしようという心は、あんた達昨日か一昨日か知らんけど先に持ってたと思う。姿として肉体を持って今ここへおいでになっているのはその後のことなんです。まず目に見えないものが先に走ってるんです。それで形のものが後から付いて行く。

そのように先に霊の世界におる人が喜んでくれるような扱い方すると、現界の自分の家族の方がまた心配事が少ない、喜びが多いような家庭になるんです。

平成29年11月号続き

表紙写真から広がった 成正坊塚の謎

しょうしょうぼう

杉本 順一

前回、「気になる方が見つかりました」と書いたのは、山川出版社『日本史広辞典』に「奈良時代の僧、開成。724年〜781年10月29日。父は光仁天皇で、桓武天皇の庶兄（天皇の直系・異母兄。※参考 母は夫人稲子・紀氏か？という資料あり）。一般に開成皇子と称されることが多い。765年 宮中を出て勝尾山に入り禅居した」とある方のことです。禅とは天子が位をゆずることだそうなんです。天皇の系図についての『纂輯御系図上』には「開成王 光仁天皇皇子、桓武天皇庶兄

これからの仕事

大倭の一つの共同体も今は段々と出来てまいりました。揺り籠から墓場まで人間が幸せにいくようにということ祈りまして、私はこの山に入った時からこうした形を始めました。

社会福祉の仕事に取り組んだりということも、私自身の為でもあるし、また反面、世間の人喜んでくれる仕事です。自分さえ良かったらいいというんやなくて、自分の持っている力を出して足らんとこへ持って行く、お互いに助け合うという、いわゆる相互扶助の社会が福祉社会、幸せな社会ということになるんです。

あるいはまた霊界の人と一緒に手をつないで、霊界と現界の両方が幸せになっていくようにということが、やっぱり宗教的に根本的な問題だと私は思っております。

今のところでは福祉の仕事だけは大体、形が付きましたけれども、人間というのは誰でも病気になる

「僧、開成」が仏門に入ったという765年に、何があったのか？

この年の8月に和氣王らが謀反の疑いで誅殺されています（歴史学研究会編 日本史年表）。和氣王というのは、山川出版社『日本史人物辞典』で調べると、「奈良後期の皇親。舎人新皇の

うことが起こって来ます。私も目え患いましたし、脳血栓にもなりました。だからこれから命のある間に、医療の方もぼちぼち出来るんじゃないかなあというような希望は持っております。（※昭和62年、法主様満76歳の時、大倭病院開院）

「七十三になっても自分は精神的に若いんや、まだまだ仕事していくんや」と思っております。けれども必ず近い将来において、棺桶が迎えに来るということは現実ですから、それがあがるために意欲を燃やして一生懸命にやりたいと思っております。

だからまあ皆さん方もそんなつもりで協力してもらったら結構です。いわゆる信者やかそんなんやなくて、仲間としてお互いに助けたり助けられたりしていく一つの社会の一員として、皆さん方に対してはほんとに自分の身内、家族と思っておりますのでね。まあ私の今日最後の言葉と致しまして、そんな意味において仲良くお付き合いをしていきたいと思っております。どうぞまたよろしくお願ひします。（拍手合掌） 文責・編集部

孫、御原王の子。755年6月岡真人の姓を賜って臣籍にくだる。のち皇籍に復して従四位下に叙せられる。756年藤原仲麻呂の反乱計画を事前に報じた功により従三位に昇り参議に任じた。淳仁天皇の廃位にもかかわらず。淳仁天皇は758年に、女帝孝謙天皇の後継として即位したものの764年に廃されて淡路に流されています。

そして和氣王は、「765年 皇嗣を望み謀反を企てるが発覚。率川社で捕らえられ配流途次に山背国相楽郡で絞殺された」とあります。この政変と開成王が仏門に入ったことに何かのつながりがあったのか？

この時代について、さらに『歴史読本』の「古



成正坊さんの
お社の菊のご紋

親王は崇道天皇と追号されたりするのである。――

さて、成正坊さんと開成王が同一人物か別人かは史実の他です。どうも私には一人と感じられてしまのですが……？

歴史に残されたものもろの事件、そこにある人間の心の闇を深く考えさせられることとなりました。

代天皇家の皇子たち」等を参照してみました。

――光仁天皇の在位は770年〜781年。在位3年目の772年に井上皇后（聖武天皇皇女）は、光仁天皇の同母姉の難波内親王を厭魅した（「妖術でのろうこと」との理由で皇后を廃され、その子他戸親王は廢太子とされ、母子ともに大和国宇智郡に配流、幽閉されたあげく775年、4月27日同日の死は謀殺が疑われている。

これらの一連の事件は、天武天皇系の皇族を皇統から排除して、山部親王の立太子をはかった藤原百川らの策略によるものと考えられる。

781年に山部親王が即位して桓武天皇となる。母は光仁天皇の夫人高野新笠。同母の弟早良親王が皇太子となるも、785年藤原種継暗殺にかかわったとして廃され淡路に配流、途中絶食して亡くなった。

桓武天皇は、怨霊や祟りに悩まされることになり、800年に井上内親王は皇后に復され、早良親王は崇道天皇と追号されたりするのである。――



節目のよゆうな旅から帰って

埼玉県入間郡越生町 菅井勇紀

あけましておめでとうございます。

昨年、十一月に初めて大倭紫陽花邑を訪れ、交流の家に二泊お世話になり、邑、神宮を案内していただきました。その節はお世話になりました。ありがとうございます。

稲刈りを終え天日に干してから、埼玉（自宅）を出発し、浜松・大倭・明石・川上村・天河村・大阪へと、自作している「ゆう琴（遊琴）」とゆう創作楽器の演奏、配達を兼ねて、ご縁の方、土地を訪れての一週間程の旅でした。大きな節目でありこれまでの一つのまとめのような旅でした。

「大倭紫陽花邑」との出会い、こうゆう所があったんだぞ！と、なんと、いや、大きな出会いでした。

とゆうのは、僕は宮城県出身で二人兄弟なのですが、弟は脳性麻痺の重度障害者なんです。弟と暮らしながら、僕も小さい時から家族でいろいろな施設に行ったり、世間の視線や距離などいろいろ感じてきました。年頃に上京し、ライフワークで音楽を続けながら、福祉の仕事に関わったり、「弟の幸せな暮らし」は僕にとってもテーマです。弟本人の望む暮らしは、僕のビジョンとどこまで重なるか、もしかして僕の暮らしにつきあってもうることになるかもしれないんですが、親にはなるべく安心してもらいたいと思っています。『ことむけやはす』を讀ませて頂き大倭紫陽花邑の歩みや世界観を僕なりに感じさせていただき、勇気と希望をいただいています。来るもの拒まず、皆、和やかに仲良くやって行きましよう、とゆう大らかさ、長曽根日子命のかむながらの精神、光明皇后

の慈悲、愛が脈々と流れ続ける地。うれしい出会いでした。また、神宮や拝殿の磐、高くなつていない所がいいな〜と感じました。探し求めていた世界観を大倭紫陽花邑に感じています。むすびの家の書棚にあった香川末子さんの詩集にも出会い、またゆつくり伺いたいと思っています。

僕の昨今の暮らしはといいますと、埼玉県越生町の山間で十二年、ひよんなご縁でここに出会い、改修工事のお手伝いからそのまま暮らしすることになり、子供が産まれ、住まいを作ったり、田畑少々、ご縁の作家の作品展や演奏会、旅人が宿泊できる集いの場。春夏秋冬にこじんまりとお祭り。いろいろありつつ、最近では楽器作りが主で今に至っていますが、もともとここは絵描きの大道さん、織りの雨竜さんと仲間の方たちが開いてきた、集いの場であり美術館だったところで、たくさんの動物たちと賑やかに暮らしながら作品を生んできたとのこと。この地に流れる確かな歴史はわかりませんが、ここを開いた先人の世界観と「共鳴する何か」に沿い、仲良くありたいと思っています。今回の旅でのご縁、出会いはこれまでの流れの源流の味がします。

さて、旅から帰り田んぼに行く〜と電気柵をしていのに猪が田んぼを掘り起こしている跡があり、稲は無事だったのですが、「ありやく、すぐに脱穀しなければ！明日はわからない」と、休む間もなく脱穀し、日も暮れてきて最後のモミ袋を運ぶ時、青・少年くらいの猪が田んぼに姿を現して、僕がすぐ近くにいるのに全然警戒心がありません。この辺の猪では姿を見せることもめず

らしいんです。たぶん、獺とかで「やるかやられるか」の関係性だからだと思っんですが。この田んぼを始めたころにお米全滅の時があったりして、僕もワナをかけたたりしたこともありました。しかし、この猪、陽の出てるうちから姿を現し、なつこい感じですよ。お米は無事、しかも田を少し起こしてくれている。逆にありがたう……って感じでした。「あく、許しの種がやってきたな〜（いろんな意味で）」と、なんだか、ふと思っただけでした。ほんと、なるべく猪たちとも仲よくしたいですね。さて、お米を持って今から娘と田んぼに水をくれる川の源流に行つてこようと思えます。それではまた!

創作琴「ゆう琴」について

僕がこの楽器に出会い作り始めたのは六年程前からです。「ゆう琴」の発案者の方と出会い、制作を勧めていただいたのがきっかけでした。「どなたにも奏でられる」とゆうところに惹かれました。この楽器に出会い、作つたり奏でたりしてきた中で音楽の新たな(懐かしい?)楽しみ方や発見があります。まず、どんな楽器かとゆうと、基本的にはとてもシンプルで(箱に弦が張つてある)原始的だと思えます。特徴としては、不規則に音を並べていて、ドの次にソがきたり、そして次にラがきたりと音が上がつたり下がつたりと弦を並べていますが、ジャラ〜ンと弾いても、適当につま弾いてもなんとなく調和感があるような調弦をしています。感覚で音を並べ調弦しているのでた〜くさんの音の並びのものが生まれ、音の並び自体が曲になっているようで、それをまた、なんとなくの感覚で奏でるので、そこからまた即興の調べになつて行く……感覚的になつてゆく。そんな感じがします。形や大きさ、弦数や音の並び、デザ



インなど様々で、木の形に沿って作つたり、個性豊かな創作琴です。材料も昔の家具の廃材や、伐採された木、ご縁でやってきた木、間伐材や雪で倒れてきた木、はたまた外国からやってきた木など……。虫食いの部分をあえて使つたり、見立て方、活かし方で楽器になり、うら若い女性に「うわ〜、とってもすてきですね〜」なんて言われると、おじさんうれしくなっちゃいます。

また奏でるところで言うと、ただ触るだけで、どこをさわつてもなんとなく調和している音が鳴り、誰でも気軽にそれぞれの楽しみ方ができると思えます。瞑想的な使い方、テレビを見ながらポロンと、病院のベットで奏でたり、自然の中で鳥や虫とセッションしたり、詩の朗読や絵本の読み聞かせでいっしょに奏でたり、お茶会や食事会のとき、耳を塞ぎ抱きかかえて奏でると楽器の振動、波を体で感じます。はたまた音楽家なら他の楽器や歌とフリーセッションとか……：まあ、百聞は一見にしかずとゆう感じで、どんなものか興味ある方は是非今度一緒に遊びましょうね。

時の波蕩(その22)

頭幽不二、内なる平和大行進

大阪府枚方市 林 修 三

齢六十五を過ぎて、どうやら足は半分霊界の方に踏み入れた様だ。法主様になつとお聞きしてきた「頭幽不二」の御言葉も果然、真実味を帯びてきた。

小さい時から空を見上げるのが好きだった。あれは帰つて来た現界の空に見入っていたのか、それとも遣つて来た霊界をなつかしんでいたのか?

又、今に至つてもまだ毎日、空を見上げては行く雲や、吸い込まれそうな青空、あるいは夜空に浮かぶ季節ごとの星や月を眺めるのが好きだ。帰つてゆく霊界に思いを馳せ、あるいは去つてゆく現界の空を惜しんでいるのかもしれない。

十一月のある土曜日の午後、Eテレの「心の時代」を見た。辺見庸氏が出演されていて、氏の父親に関連して、前の戦争で日本軍が中国で行つた残酷で恐ろしい話をされていた。その後、夕方の仕事に向いた私の頭の中では、本当につらい人間の残酷性についての疑問が反復していた。そしてその通勤の電車内で最近、読み続けている本はやはりたまたま、ディタというユダヤの少女がアウシュビッツで体験した、その日常を描く実話を元にした『アウシュビッツの図書係』という小説だった。そこにはいつかは向き合わなければいけないと思いつつ人間というものの一つの姿、被害者であり加害者にもなりうる人間の姿が描かれていた。

それは他でもない私自身の姿でもある。六十五年生きた人生で、現界を去る前にははつきり知つ

ておかねばならない私自身の心のあり様である。「顕幽不二」、この大倭に縁のある方には馴染み深い法主の残された御言葉は、あまりにも大きな今日的な意味があると思える。混沌に混沌を極める二十一世初頭の只今だが、そのすべての根本的要因は、現界しか認めないあまりにも頑迷な近代人の迷妄にあると思われる。残された私自身の時間の内でこの大切な教えを一人でも多くの方に伝えていきたいものだと今、切に思う。人は死んで、すべてがおしまいとほならない事実を。

ともあれ、残酷な悪魔的な世界から、神や仏も在らず天国的な桃源郷の世界迄を含んだこの世のあり様は、そのまま私自身の心のあり様には違いない。そして宇宙のほんの一部にすぎない私の心そのものは、広い世界のあらゆるもの達とつながっているに違いない。アウシユビッツも、中国戦線も、原爆の悲劇も、この世で起こった事の凡てと、私は無関係ではないという事だと思ふ。私が世界で、世界が私であるのだから。

そしてやはり気付く。昭和三十年代、「三丁目の夕日」的な幼い時の原風景から始まった私の人生の、何気無い日常のありがたさを。様々な葛藤があった。軋轢も、事件も……。だけど支えてくれる家族や友人、恩師、名もなき多くの方々、動物達、植物、太陽や月、土、水、風、空が私を励まし、何かを語ってくれた。そのありがたさに改めて気付き、感謝しかない。その大切な日常が育んでくれる「人間性の向上」を糧に、法主の言われる大倭的「平和大行進」の一員として、これからも皆様と共に歩んでゆきたい。顕幽にはためく「奈母太加天腹」の幡のもとに。

ハンセン病の真実を追い続けて

—35年以上にわたる報道カメラマンとしての取材から—

大倭会文化講演会報告

F I W C 関西委員会 戸 張 あかり



講師：宮崎賢さん

た今はなおさら、知らない人いきなり写真を撮られたらどんな事に使われるのか私もぞっとしてしまうけど、お付き合いのあった

映像を見る時、私たちは映し出された風景、語られる言葉、声のトーン、そして表情等からいろんな情報を読み取ろうとする。その情報量はきつと認識しているよりもずっと多くて、その結果、文字よりも生々しく時代の空気のようなものも感じさせてくれる。

その映像というものを通し、ハンセン病を見て、そして伝え続けてきた宮崎賢さんの講演会がNPO法人むすびの家も協賛して平成29(2017)年11月11日に大倭で行われた。

◇ 宮崎さんに初めてお会いしたのはいつからだったか、きちんとは覚えていないけれど、夏祭りやちんどん隊をする私たちの方に毎年毎年カメラを向けておられたので顔だけは知っていた。住宅の庭先で、外につながる廊下で、いろんなシーンでカメラを回す宮崎さんを、実は私は少し警戒していた。

F I W C の先輩から、園の方は今まで受けた差別からカメラを向けられるのを嫌がる、という話を以前から聞いていたし(これも自分置き換えてみても当たり前の話でSNSが発達した今ではなおさら、知らない人いきなり写真を撮られたらどんな事に使われるのか私もぞっとしてしまうけど、お付き合いのあった

方からも「カメラは好きじゃない」と言うのは実際に聞いていたことと、隔離されていた入園者の元に若い人達が慰問で演奏して喜ばれている、そんな風に見られる事に違和感がある、というか、どちらかというとお世話になっているのはこっちなのにそう映ってしまったらかえって申し訳ない、そんな気持ちだった。でも宮崎さんの撮られた映像を見て、講演会を聞いた今となっては、自分の思い込みに反省するしかなくなっている。

◇ 宮崎さんがハンセン病に深く関わるようになってのは20代後半の頃、今からだいたい35年前だそう。瀬戸大橋工事の時代、長島愛生園の自治会が当時の大臣に愛生園と光明園のある長島に架橋を陳情。大臣が長島に視察に行くにあたり宮崎さんが勤めていた山陽放送でも取材をすることになった。当時のデスクからの指示は「撮影は対岸からでいい」。誰が取材に行くかの話になると、先輩たちの発言が差別的で腹が立ち、宮崎さんは「私が行きます」と手を挙げた。

取材中、入園者で架橋促進委員長であった加川さんの言葉「島流しの生活を1日も早く終わらせてほしい」が胸に刺さった。メディアはハンセン病から目をそらしてきた、と感じた。会社に戻ると「1分のニュースにしろ」と言われ、こんな重要なニュースは50秒で伝えられるはずがない、と宮崎さんはドキュメンタリーの製作を希望。宮崎さんの希望はすぐには許可されなかったが数ヶ月後、会社の会議でドキュメンタリーの製作が決まったこと、本格的に長島でも取材が始まった。

宮崎さんの話を聞いていて、驚かされるのは取材に対する根気強さだ。予防法も廃止になっていない、橋も架かっていない時代を私は知らないから、想像するしかできないけれど、快復者に対す

る差別も、テレビカメラを向けられることへの拒否感もどれほど強かったことだろうかと思う。カメラを持ち愛生園に来た宮崎さんへの苦情は連日自治会にあり、宮崎さん自身「正義感だけで入ったものの、心が折れそうになった」と話す。

それでも諦めなかった宮崎さんはカメラを持たずに長島に行き、お茶を飲む中で入園者と語り、ハンセン病を学んだ。

患者と職員の桟橋が分けられていたこと、退所規定のないままの隔離であったこと、強制労働、優生思想による断種や堕胎、重監房、戦時中に投げかけられた屈辱的な言葉。

そして市民の通報システムにより患者が隔離された、官民一体となった無頼県運動があった。それは「国の政策だけではない」「市民も関わっている」。愛生園の詩人、島田等さんに言われた言葉にふれた宮崎さんは、「伝えていかなければ……」と感じる。宮崎さんはこの運動に対し、「現在でも変わっていないこの国の姿を見た」と話す。市民が無関心であり、メディアも含めて障害者を排除するシステムは今日も変わらずあるのだと。

◇ 強い思いのある人には出会うべき人や出会うべき事柄があつて、お互いが引き付け合うことがあるのかなあ、と思うことがあるけれど、私は宮崎さんの話からもそれを感じた。もちろん、なんとなく出会うわけではなく、それ相当の想いの強さがあるからなのだけだ。

宮崎さんはある時、長島愛生園の宇佐美治さんから古いフィルムを託される。その古いフィルムは園がゴミとして捨てた中から、宇佐美さんが信念を持って拾い集めていた様々な資料、実際に使われていた生活道具等の中の一つにあつた。

ハンセン病者が生きてきた歴史を残そうとする

宇佐美さんと伝えようとする宮崎さんとの間に起きた強い引力。この映像は今回の講演会、そして昨年行われたF I W C関西委員会が主催したハンセン病フォーラムの中でも上映された。

肉体労働をする入園者の姿、園で暮らす子供達の姿、そして船から降り桟橋を歩き、長島に上陸する若い女性の姿。白黒でコマ送りが早いような無声の映像。知っているような知らないような場所。今まで本や話でしか知らなかった時代の映像を私は息を飲むようにして見た。きつと会場にいた多くの人もそうだったと思う。

その物言わぬ女性の姿は、どんな思いだったのか、どんな経験をしてここまで来てこれからどんな生活が待っていたのか、近付こうにも近づけない霧のような、でも確実に起こっていた現実として目の前に現れる。

宮崎さんの話には、たくさんの宮崎さんが出会った人たちの名前が出てくる。それは宮崎さんが一人一人と真剣に向き合って話をし、何を伝えようとしているのか感じ取ろうとされてきたからだと思う。ハンセン病快復者、入園者、社会復帰者、そんな匿名の話ではなく、○○さんという一人の人間が生きてきた証として。「宮崎さんには話す」「宮崎さんなら撮っていい」そんな言葉が聞かれるのもそのためだと思う。実際、宮崎さんの撮った映像、インタビューではドキッとさせられる事が多々あるのだけれど、そこにはファインダーには映らない、撮られる側と撮る側との関係性があるのだと思う。

◇ 宮崎さんの講演を聞いた後、なぜか私の頭の中ではある曲が流れていた。

男と女の間には 深くて暗い河がある
誰も渡れぬ河なれど えんやくら 今

日も船を出す

快復者の語る言葉と長い付き合いという時間を経て映し出された映像は、一人一人の生きてきた証として、そして私たちが生きている社会を映し出す鏡として、私たちのありようを問い続ける。

人と人とは違うのよ、分かり合えないのよ、そんな抗えないような実体験ではなくて、それでも近付こうとすることが起こってしまった事実を今、そして未来へと繋げていくたった一つの方法なのだと思う。

やっぱり宮崎さんは船の漕ぎ手なのだ。渡れぬ河だとしてもなお漕ぎ、近付こうとし、映像という道具を使い、ハンセン病者が歩んだ人生と私たちを繋げる。そして快復者の言葉を聞き、映像を見た私たちは権をわたされ、それぞれがどう過去と向き合い、どんな今を、そして未来を目指すのか自分自身の河を見る。

◇ 講演の中で宮崎さんは出会った快復者の「温かい心」「豊かな人間性」「苦難を生き抜いた力」に引き寄せられた、と話されている。これは快復者と出会った多くの人も感じる共通点なのではないかと思う。私もまた、お茶(以前はお酒だったけど)を飲み交わす中でふとした時に見える温かさ、強さ、そして多くのことを経験した中から紡ぎ出される言葉に自分自身を振り返ったり、今まで気づかなかつた視点を与えられたり、時に大いに励まされながら、出会った人々一人一人の魅力に惹かれ、また会いに行く。河を渡ろうと試みることは決して深くて暗いことばかりではないことを出会った快復者達は教えてくれている。

〔戸張あかり・1994年日韓合同ワークキャンプ参加、1996年現在、愛生園の夏祭りにて農業隊・ちんどん隊として参加。大阪市在住〕

あじさい日誌

12月15日 大倭神宮月次祭。

12月22日 冬至。大倭の大晦日にあたるこの日、紫陽花邑各所と大倭神宮に注連縄や門松がととのえられて、日聖祭のための諸準備が行われました。

12月23日 大倭74年元日。法主生誕106年の日聖祭が行われました。午前10時から奥津城でご挨拶、10時半から大本宮拝殿において祭典。

直会弁当を頂いたあと、午後1時から大倭会館において直会演芸会。エントリーは9演目。



手品 (且田容子さんと助手の中島武宣さん)



アマミ舞 (坂田洋美さん)



藤娘 (永仮あづみさん)

12月24日 午前9時から大倭神宮の大掃除。雨模様との天気予報でしたが、好天に恵まれお昼頃には終わりました。日聖祭から交流の家に連泊の永仮まゆり・あづみ姉妹(神奈川県大和市)も参加してくれました。
12月25日 午後4時から『おおよまと』編集会議。タイミング良く、今夜帰るといふ永仮姉妹も出席。正規編集部員に昇格? 12月27日 交流の家でFIWCの恒例になっている年末キャンプが始まり、今年も各地からの参加者が大集合しました。大倭のお餅つき参加を最後のプログラムとして、30日まで。
12月30日 朝9時から大倭会館の北側(法主奥津城の下)でお餅つきを行いました。
12月31日 年始祭のための諸準備が行われました。
夜11時半から邑の若者達により一年間の祓い清めのため、拝殿の大太鼓が365回打ち鳴らされました。
1月1日 大倭神宮年始祭。午後12時45分から法主奥津城や邑内5カ所の各守護神さん達に挨拶回りが行われ、2時から大倭神宮で祭典が行われました。
1月5日 午前11時から大本宮拝殿に大倭殖産・大倭印刷・大本宮・大倭安宿苑(代表)・大倭病院(代表)が集合して仕事始めの会が行われました。
1月6日 大倭神宮月次祭。

この日は有志の皆さんが高橋良美・見田瑛子さんから祭典準備のやり方を引き継ぎました。
午後6時から大倭会館で教長さん主催によって、邑人やご縁の皆さん、大倭町自治会関係者が鍋を囲み恒例の新年会。
大倭安宿苑では(菅原園)
12月16日 大イベントの年忘れ会を開催。多くのご家族が来られ、コンサートや美味しい料理で楽しい時間を過ごしました。
(須加宮寮)
1月1日 元旦祝賀会でおせち料理を頂いた後、大倭神宮まで初詣に出かけました。
(長曾根寮)
12月21日(特養)誕生会で9名の方(内傘寿と米寿が各1名)のお祝いをしました。
12月25日(デイサービス)手品、トランプペット演奏、ジェルキャンドル作り、自作DVDの上映会等盛りだくさん

法主帰幽祭のご案内

日時 平成30年2月9日(金曜日)

●午後1時40分より法主様奥津城においてご挨拶をいたします。

●午後2時より大本宮拝殿においてお参り後、平成3年12月23日の降誕祭の映像記録を見ていただき、その後教長さんのお言葉をいただきます。

現身はよし朽つるとも永久に
結ぶ心のかわるものは

宗教法人 大倭教

あんない

*玉緒祭(大本宮)
2月3日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結びを感じて感謝するお祭り。玉は命を、緒は心もを言う。

*月次祭(大倭神宮)
2月6日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*法主帰幽祭
2月9日(金) 上欄参照。

*大倭会主催第589回祓会
2月11日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)
2月15日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*申孝祭と月次祭(大本宮)
2月23日(金) 午後1時20分より大倭神宮にて申孝祭が、2時より大倭大本宮拝殿にて月次祭が行われます。

申孝祭は、神武天皇が行った祭政一致の故事、鳥見山中の靈時を記念するお祭りです。

ヤマトの鳥見と九州の高千穂の武力による争いであったが、金鶏発祥(和の光)の天啓を受けて円満な国譲り、即ち講和による政権交代がなされたことを、神武天皇が感謝された記念日です。詳しくは平成26年7・8月号の法主様の遺稿「大倭神宮伝承の紀」等をお読み下さい。